

タイトル:平成 23(2011)年度 教育セミナー

日時:平成 23 年 9 月 17 日(土)~20 日(火)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「オランダの移民政策とクルド系住民の活動」

寺本 めぐ美(津田塾大学大学院後期博士課程)

「中東☆イスラーム教育セミナー」(2011 年 9 月 17 日~20 日)では、受講生発表として修士論文の概要、また 8 月末から 9 月初旬に実施したオランダにおける現地調査の報告をさせていただいた。調査から戻って間もなかったものの、修士論文の内容と関連付けて報告することで今後の研究計画の整理にもなった。先生方、受講生の皆様からたくさんの質問・コメントを頂き、辛くもあり嬉しくもあった。

特に、オランダにおけるクルド系住民のクルド人意識は、「保持」されているものなのか、「再生産」されるものなのか、という問いかけは、今後の研究において常に念頭においておく必要がある。また、オランダの国籍法や、クルド系住民の国籍取得状況に関するコメントは、今後の課題を明確にするものであった。その他にも多くの大変有益な質問・コメントを頂いた。

先生方の講義や受講生発表においては、以下の三点が特に印象深い。はじめに、「イスラーム」「ムスリム」「アイデンティティ」など、聞きなれた(と自分が思う)言葉遣いに関しても、注意深い検討が必要であることを改めて感じた。

二つめは、飯塚先生の言葉をお借りするとすれば、イスラームの「わからなさ」についてである。オランダで生活するクルド系住民に焦点をあてる自らの研究と照らし合わせて、イスラームの「わからなさ」について整理する必要がある。

三つめは、資料の読解に関して、ウラをとること、常にその資料の位置づけを検討することの重要性についても考えることができた。高松先生の徹底的な資料批判の姿勢は、自身の資料の扱い方に問い直しを迫るものであった。

最後に、セミナーの改善点として強いてあげるとすれば、受講生発表をしない参加者の研究テーマ、参考文献についてより詳しく知る機会があるとありがたいと感じた。自身の関心と近いテーマ、フィールドの参加者がどのような切り口で、どのような資料を活用しているのかを知ることは、研究の発展に必ず役に立つものではないかと考える。

先生方をはじめ、事務局の千葉様には大変お世話になりました。ありがとうございました。